

我が名は☒兇手☒ 其は、貴方を殺す者の銘也。

兇手に惹かれし者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マスター、それも断定遊戯派マスター専門のティアン暗殺者のなものの。

目次

我が名は“兇手”。其は、貴方を殺す者の銘也。

我が名は「兇手」。其は、貴方を殺す者の銘也。

□とあるマスターの主観

「??マスター殿、お命頂戴致します」

気が付いた時には、全身黒づくめのその女は俺達パーティーの前に居た。顔は、影の角度で見るとは出来ない。

【斥候^{スカウト}】のジョブも齧っている俺に、全く気が付かせることなく、ソイツは俺達に刃を向けていた。

「??ティアン^{アサツシン}の暗殺者か??」

「左様。貴方に恨みはありません。されど、これも仕事故。大人しく、首を差し出してください。さすれば、痛み目を見ることもございません」

「??それなら、何故? 何故、俺たちを狙うんだ?」

そいつは、赤い手形の付いた黒い仮面を付けると、ナイフを構えた。

「兇手」。職業そのものの名を冠する暗殺者。

その存在を、その仮面をつけたティアンの暗殺者についてを、噂程度にだが聞いたことがある。

「貴方は、ティアンを見殺しにして効率よく狩りを行った。それ自体に、拙^{せつ}が異議を唱えることはございません。ですが、我が雇い主の少年が、貴方の命を求めました」

「少年?」

「これ以上の情報提示はしかねます」

そう言つて、ティアンの女「兇手」は刃を構える。

「それでは、参ります」

俺達も、退くわけにはいかない。相手がティアンとはいえ、暗殺者風情だ。殺しても指名手配もされない。犯罪じゃないんだから、いつもとんなら変わらない。

俺は、仲間に声を掛けようとして、後ろを振り向き絶句した。

「プローイ??助け??て」

「な、なんで??!??」

俺のパーティーメンバーであった数人のマスターが、投擲されたナイフにより喉元を貫かれ、死亡していたのだ。

有り得ない。俺達は上級職のパーティーだぞ？それが、こんな簡単に?!

そう思う反面、この目の前に立つ存在が、噂に違わぬティアンで、暗殺者であるなら、この惨状も納得出来てしまった。

「貴方はこのパーティーのリーダーとお見受け致しました。貴方には、こちらの武器で死んで頂きます」

そう言つて女が取り出したのは、一本の直剣。鞘から抜き放ち、自然体で構えたその姿は、流石はティアンこの世界に生きるものといったところ。マスターよりかは余程板に付いている。

だが、ここまでされて引き下がれるわけもない。絶対に殺す。

「分かったよ、ぶっ殺してやらあ!!」

「??なるほど、マスターならば斯様な判断も容易、と。まだまだ学ぶことは多い」

余裕の雰囲気崩さず、女は俺を見据える。その余裕、いつまで続くか、見ものだ。

俺は、己の獲物であるTYPE・アームズのエンブリオ、【雷鳴戦斧バアトチャク】を顕現し構える。

「いざ?!参る」

「行くぞー! 必殺、《振り割く雷鳴》!!」

上級職【バリアン・ファイター 蛮 戦 士】の臂力に任せ突撃、バアトチャクを振り下ろす。これが俺のエンブリオが誇る必殺スキル、《振り割く雷鳴》。今まで、これを食らって死ななかつた奴はいない。

それは、雷を伴って暗殺者を襲った。戦斧の一撃が地面を引き裂くかのように抉り取り、さらに空から雷が追撃する。

これを喰らえば、ティアン最高峰の暗殺者と名高い「兇手」様も死ぬに決まっている。

「では、次は拙の番でございませうば?!その腕、頂戴致します」

「はっ！」

しかし、暗殺者は死んでいない。

いや、それどころか全くの無傷であった。

「兇手」は、バアトチャクを握る俺の右腕を直剣で斬り捨て、俺を蹴り飛ばした。

「ぐあああ!!」

訳が分からない。どうして、死んでいない。何故、無傷なんだ。俺と俺の上級エンブリオなら、NPC如き余裕で殺せるはずなのに！

「クソがアあ!!」

俺は、半ば狂乱しながら、アイテムボックスよりジエムを五つ取り出す。これなら、こいつを消し去ることも容易だ！

「くそくそくそ、死ね!!」【ジエム―《クリムゾンファイア》!!】

解き放ったのは、絶大な火力を誇る《クリムゾンファイア》。それを五つ。

それは、忌まわしい「兇手」を目掛けて襲い掛かり、着弾。紅炎と爆発を起こした。

爆煙が晴れると、そこには人の影はおろかすつきりとした平地が広がっていた。

「や、やったか?」

俺は、警戒も払わずにその一点を見詰める。

??ふう、やっと死んだか。

今日は、疲れた。さっさとログアウトし

「いえ、拙はまだ死んでおりませぬ」

「ッ!?!」

その声に驚き振り向いた瞬間、

「――《兇手》」

「かひゅっ?!?」

俺の首はズタズタに切り裂かれていた。
何が起こったのか理解出来ないまま、俺は死亡した。

【致死ダメージ】

【パーティ全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】

□皇都ヴァンデルヘイム 【兇手】ラ・モールⅡクリステア・デッド
ハンド

「??他愛もない」

刃を一振りし、鞘に納める。この剣は、我が依頼主である少年の物。
返却せねばなるまい。折らずに済んで良かったと言えよう。

「??かふっ??」

未だ、拙には血統特殊技能《兇手》^{スキル}は荷が重い。

仮面を外し、裏側に付着した血液を服の袖で拭う。

「??我が父よ。クリステアは、ラ・モールに、デッドハンドの名を冠するに相応しい娘となれるでしょうか?」

いや、ならなくてはいけない。この【兇手】の務めを授かり、《兇手》を受け継いだからには、拙はこの命尽きるまで、業を磨かねばならないのだ。

そろそろ夜も更ける。ひとまずは、我が依頼主の元へ赴くとしようか。

拙は月明かりに照らされた皇都を、民家の屋根伝いに駆け抜ける。

——我が名は「兇手」。^{マスター}遊戯者を殺す者也。